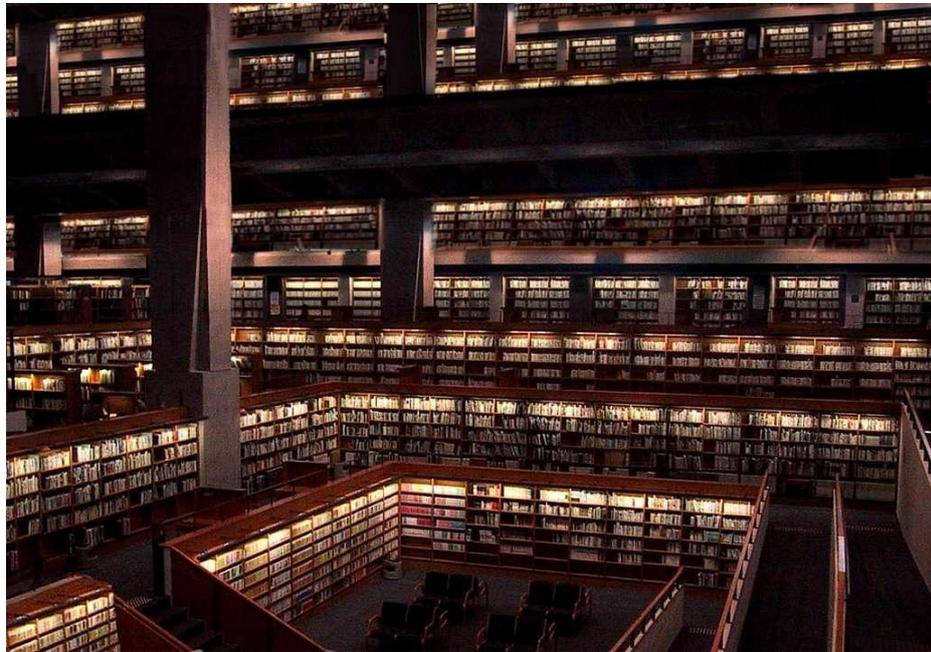


里菜と続編図書館



直也は運命のとびらの前に立っていた。

雑居ビルの間の狭い路地。目の前に赤錆さびの浮いた古い鉄の扉とびらが立っている。戻ろうか——一瞬そんな思いがよぎったが、路地の入口の方に高坂達こうさかが立っていて笑い合いながら早く行けと身振りで囃はやし立てている。

この扉が異世界につながっている——馬鹿馬鹿しい噂うわさに付き合ってしまった自分に舌打ちしながら直也はノブに手をかけた。思いの外ノブは軽く回って扉は軋きしむことなく開いた。

「えっ」

扉の向こうに抜けるような青空が広がっている。足元は——地面がない。どうなってるんだ？直也は身を乗り出した。

それを待ち受けていたかのように低い唸うなりを上げてつむじ風が巻き上がった。『うわっ』バランスを崩した直也はそのまま扉の中に倒れ込んだ。墜ちる——と思った瞬間、何か柔らかいものの上に着地して体が弾んだ。

「ぐうっ」

体の下で誰かが悲鳴のようなうめき声を上げた。見ると白いブラウスを着た金色の髪の少女が自分の下敷きになっている。二人は干し草の山の上にいるようだ。ふんと枯れた草の匂いがした。うめきながら目を開いた少女と今にも額ひたいがくつつきそうな程の距離で目が合った。彼女の緑色の目が大きく見開かれた。

「えーと……」

言いかけた直也の右頬に痛みが走った。そのまま干し草の山を転がり落ちて何かにしたたか顔面をぶつける。牧童が羊を追うのに使うのだらう。太い杖が目の前に転がっていた。ひっぱたかれた上に突き落とされたと理解するまでしばらく時間がかった。『あにすんだよ』直也は抗議の声を上げながら半身を起こしたが辺りの異様さに言葉は尻すぼみになった。

ここは——どこだ？草原が緩い起伏を描きながらどこまでも続いている。ここに牛や羊がいて草を食んでいる。遠くに石造りの家が見えた。はつと気付いて自分が落ちてきた空を見上げる。あの古ぼけた扉が宙に浮いていた。扉はまるで直也をからかうみたいに蜃気楼のように霞んで——消えた。

「ゴルドバだ」

少女が叫んで立ち上がった。彼女が睨む方向を見ると丘の向こうから土煙を立てて何か近付いて来た。馬に乗った数名の男達がみるみる迫ってくる。

「シンシア、今日こそは一緒に来てもらおうぞ」

髭面の太った男が声を張り上げた。男達はあつという間に干し草の山を——シンシアと直也を取り囲んだ。

「誰が行くもんか。さあ、切り裂かれないのは誰？」
彼女は小さな声で何か唱えるとしなやかに腕を振った。干し草が舞い立ち彼

女の指先からつむじ風が巻き起こる。つむじ風はうなりを上げて目に見えない鞭むちとなり手前の男達を馬上から叩き落とす。返す腕で第二波が飛んだが男達は慌てて馬を下げ、かろうじてかわした。しかし、シンシアの攻撃は読まれていたらしい。

「やれ！」

髭面が間髪入れず命令を下すと、三方から分銅のついた細い鎖が飛んできて彼女の腕ごと体に巻き付いた。シンシアは懸命に身もがくが三人の男達が鎖の根元を締め上げていて容易に解けそうにない。

「腕を封じちまえば風も使えまい」

髭面が不敵に口元を緩めた。

「うわりやあ」

奇声を張り上げて直也は干し草を駆け上がった。不安定な足元にふらつきながらシンシアの前に仁王立ちになる。手には牧童の杖を持って髭面を睨んだ。

「女の子一人に男が寄ってたかって、恥ずかしいとは思わねえか」

「ああん、おめえ誰だ」

不意を喰らった髭面は不機嫌そうに言った。直也はそれには答えず杖を地じ擦すり八はっ双そうに構かまえると間合まあいを計る。『きええつ』声を張り上げると鎖を握る男の小手を正確に打ち据えた。次々に鎖が放されシンシアは身をよじって体にまと

わりついた鎖を振りほどいた。

「北山流師範代、北山直也だ。覚えとけ」
杖を髭面に突き付けて直也は言った。

「りーなちゃん。何読んでるの？」

桃ちゃんが言ったが里菜は気付いていないみたいだ。

「里菜ちゃん」

桃子ちゃんがどんと背中を叩く。里菜はびくつと背筋を伸ばした。

「何するん、桃ちゃん」

里菜は声をとがらせた。

「だって、ぜんっぜん気付かへんねんもん。何読んでるん？……あ、これかあ」

桃ちゃんが里菜の手から本を取り上げる。『ディアフォレストの風』というタイトルが読めた。

「渋谷でバイトしてた高校生が剣と魔法の世界にまぎれ込むという話やる。まああやっつたな」

桃ちゃんは本を返しなから言う。

「そう？結構おもしろいで」

里菜は本を開くとまた続きを読もうとした。桃ちゃんは慌ててまた本を取り

上げる。

「そやのうて、ちよっと聞いて」

里菜は本を取り返そうともがいたがすぐに諦めた。桃ちゃんが『聞いて聞いて』と言い出したら聞き終えるまでは返してくれまい。

「すごい話、聞いたんよ」

放課後の教室に残っているのはもう二人だけだった。本に夢中になって気付かなかったけれどいつの間にか日が傾いている。――そろそろ帰らなきゃ。

「バイクを追い越してくお婆ちゃんの次は何？」

桃ちゃんは最近、都市伝説にハマっている。

『友達のお姉ちゃんが学校で聞いたらしいんやけど』という風に桃ちゃんの話はいつもなぜか直接誰かから聞いたという事がない。話の中身は夕方に道路で待ち伏せしているマスクの女みたいな妖怪染みた話から、ピアス穴を開けるのに失敗して目が見えなくなったなんていう変にリアルな話までいろいろだけど、後で落ち着いて考えると他愛のない作り話ばかりだ。それでも話自体は面白いから里菜は桃ちゃんの話聞くのが好きだった。

「友達の友達がおじさんから聞いた話らしいんやけどな。町のどこかに秘密の図書館があるらしいねん」

「噂になってる時点で秘密やない気がする」

もつともなツツコミだ。

「ま、ええやん。そこな、物語の続編ばっかりが置いてある図書館なんやて」
「どういうこと？」

「あのかな。たとえばロミオとジュリエットとかフランダーズの犬とかの続編って聞いたことがないやろ」

「言うか、あつたら怖い気がする」

「そういう実際には出版されていない幻の続編ばかりが、ずらっと並んでるんやて。どうよ？あつたらちよつと読んでみたいと思わへん？」

「まあ……、興味がないでもない」

「よっしゃ、決まりやな」

桃ちゃんは威勢よく机を叩いて立ち上がった。

「ちよつ、ちよつと何が決まりやの」

「だ・か・ら。その秘密の続編図書館を探しに行くんやん」

中学二年ともなるとブレザーの制服も様になってくる。二人は慣れた足取りで夕日の差す大通りを並んで歩いていった。身長百七十センチの桃ちゃんと並ぶと里菜は頭一つくらい低い。後ろでくくった長い髪を揺らしながら遅れないように里菜は早足で歩いて行った。

「で、どこに行くん？」

「駅前の雑居ビルの脇に細い路地があるやろ。そこに古うい鉄の扉があるねんけど……」

「それって、ディアフォレストのパクリやん」

「たまたまやて。普通、図書館って聞いたらつい一つの建物やと思うわな。けど、それはフェイントや。そんなんやったらどこに建ってても秘密にはできんやろ。一見その向こうに何もないと見せかけておいて……」

「見せかけんでも誰も探さへんし」

里菜の言葉を尻目に桃ちゃんはどこどん歩いていく。マクドナルドの前を過ぎ、シヨツピングモールの中を通り抜け、エスカレーターを二階分下がって外に出ると——五階建ての雑居ビルが目の前にあつた。

「ほら、あの扉。いかにもやと思わへん？」

ビルの正面を回り込んで脇の狭い路地を入っていくと確かに鉄の扉が見える。

「ただの古い扉にしか見えんけど」

扉の前に立って里菜は感想を述べた。元は灰色のペンキが塗られていたらしい扉はところどころ赤錆さびが浮いてまだらになっている。

「そう見せかけて扉の向こうに真っ白い壁の秘密の図書館があるんやて。ほな

行くで」

桃ちゃんがノブに手を伸ばした。開かないんじゃないかな——予想に反してノブは軽い音を立てて回った。

ぎい——扉は里菜の大嫌いな金属が軋きしむ音を盛大に立てて向こう側に開いた。コンクリートの剥き出しの床が見える。

「あっ」

コンクリートの床の向こうには急な上り階段があった。見上げるとビルの隙間に夕暮れ空が見えた。が、光はここまで差してこないで薄暗い。階段のてっぺんにはまた鉄の扉が見えた。

「行くの？」

「当然」

気乗りしない里菜を引っ張って桃ちゃんが階段に足をかける。二人の後ろで大きな音を立てて鉄の扉が閉まった。きつとどこかお店の裏口につながって、お店の人に叱しかられるいうオチやと思うんやけど……。桃ちゃんにぐいぐい引っ張られて行きながら里菜は嫌な予感しかしなかった。

「着いたで」

さっきのと大差ない何の変哲もない扉が立っていた。桃ちゃんは躊躇ためいなく扉を押し開ける。明るい光がぱっと差して里菜は思わず目をつぶった。『あー

あ』隣で桃ちゃんの溜息が聞こえて里菜は目を開いた。扉から顔を出すと右手にシヨップینگモールが見えた。その向こうにはマクドナルドがある。

「これって、大通りじゃん」

「うーん。単なる抜け道だったか」

桃ちゃんは残念がりながら扉をくぐって大通りに出た。

「異世界に通じてるって本気で思ってたん？」

里菜も笑いながら後に続く。駅前の大時計が六時を報せた。二人はそれを潮におしゃべりをしながら家路についた。

次の日は学校が休みだったので里菜は借りていた本を抱えて図書館に行った。もちろん秘密の図書館ではなく、いつもの町の図書館だ。借りていた本を返した後、里菜はぶらぶらと書架を見て回った。今は『ディアフォレストの風』を学校の図書館で借りて読んでいたので新しい本を借りるつもりはないが、新刊書を覗いてみたかったのだ。

新刊書の特設棚に行き、左から順に本の背を目で追う。続、続、続……。昨日、桃ちゃんには言わなかったが里菜は新しい本を読み始める時に変なクセがある。その本に続編が出ているかどうかを確かめたくなるのだ。新刊書の中には続の付くタイトルが一冊とシリーズ物の新刊が三冊あった。

四冊はセーフ。

心の中でそう眩つがやく。続編が出ている物語は安心して読める。結末で主人公が死んだりしないし、悲しい別れが来たって続編で再会するに決まっているからだ。いつの頃からだろう。里菜は読む本をそんな基準で選ぶようになっていた。そういえば『ディアフォレストの風』に続編が出る予定はあるのだろうか？先月出たばかりの新刊だからまだしばらくは出ないだろうけど気になった。

『続編が出ないのならいやだな』

用心深い里菜にしては珍しく、つい目に付いたので借りてしまったのだ。一般書架に回って同じ作者の作品を探してみる……。シリーズ物をたくさん出している作者なら期待できそうだ。あった——けど届かないじゃん。見付けた本は棚の一番上に並んでいた。台がどこかに……。見付けた！

書架の向こう端にキヤスターの付いた台があった。さっそく押して来て上る。目の高さより少し上にお目当ての本が並んでいる。が、ざっとタイトルを目で追って里菜はがっかりした。単発の小説ばかりでシリーズ物は書いていないようだ。……続編は？続、続、続——あった。

『続……。ディアフォレストの風？』

なんで？本編が先月出たばかりなのに続編が、しかも一般書架になんかあるはずがない。恐る恐る里菜はその本に手を伸ばした。桃ちゃんなら楽勝で届くだろうに——背伸びをした体勢でよけいなことを考えてしまった。集中力が逸そ

れたのがまずかったのかもしれない。バランスを崩しそうになってよろけた拍子に指に当たった五、六冊の本を床に落してしまった。けたたましい物音に近くにはいた何人かが振り返る。うわっ、やっちゃったよ。里菜は慌てて台から降りると本を拾い集めて揃える。又、台に乗ってぽっかり空いたスペースに急いでその本を押し込んだ。

何だかまだじろじろ見られているようで居心地が悪い。里菜は台を元あった場所に急いで戻した。ディアフロレストの風の続編は気になるけど又今度しよう。

ふと床を見ると小さなカードのようなものが落ちていた。端に穴が開いて白いリボンが結ばれている。栗かな？カードは地の色が目の覚めるような赤で下半分に小犬の絵が描かれていた。今にも動き出しそうな精緻な絵に里菜は目を奪われた。——これ欲しいかも。

でも誰かの落とし物かもしれないし——。思い直して受付に向かった。

「だから、これくらいの大きさですわね」

受付では里菜と同一年くらいの子の男の子が何やら熱心に話している。

「いやあ、見かけてないけど。そんな薄い物だとなかなか気付かないんじゃないかな」

「あつたらすぐに分かります。目立つ色ですから」

里菜がなんとなく割り込みづらくて後ろで待っているとおじさんが『何か用？』と声を掛けてくれた。

「これ、落とし物かな？って」

里菜が差し出したカードを見て、男の子とおじさんは同時に『あっ』と声を立てた。

「これ、どこにあった？」

男の子は里菜からひったくするようにカードを奪い取ると早口で言った。

「本に挟んであったはずだ。どこにあった？」

たたみかけるように訊いてくる。まるで里菜のせいで探し物をしてるみたいな口振りです。いと分と失礼な言い方だ。

「せっかく届けに来たのにその言い方はないんちゃう？」

「ついいつも勝気な口調になる。」

「そんなことはどうでも良い。急いでるんだ」

そんなことという言葉にカチンと来たがキリがない。里菜は男の子を連れてさっきの本棚に戻った。

「一番上の棚のどれかに挟んであったと思うんやけど」

里菜の指差す方を男の子は見上げた。男の子の背は里菜と同じくらい。とても手が届きそうにない。振り返るとさっきと同じところに台があった。何を思

ったのか男の子は手のひらを上にして台の方にすっと腕を伸ばすと、こっちに
来いというようにくっくと指を曲げた。

台が——まるで引き寄せられるように滑って来た。男の子はふわりと飛び上
がると軽々と台に飛び乗った。あつけに取られている里菜をよそに男の子は人
指し指を立てて左端の本の背にあてがった。そのままスツと一気に右端の本ま
で指を滑らせる。と、中の一冊が青白い灯を灯したように光った。

「あつた」

安堵するように呟いて男の子はその一冊を引き抜いた。表紙のタイトルが里
菜にも見える。『続・ディアフォレストの風』——あの本だ。男の子は音も立て
ずに台から飛び下りると台に向かつて軽く手首を振った。すると台は元あつた
場所に滑って行って寸分たがわぬ位置で止まった。——いや、ないないない。
里菜は今見てしまったことを心の中で否定した。

「ちよつと……」

どういふこと？と訊こうとして振り返ると男の子は出口に向かつて歩きだ
していた。つて、説明なし？しかもさっきの本、貸し出し手続きせずに持ち出
そうとしてるし、里菜はむしように腹が立ってきて男の子の後を急いで追いか
けた。

男の子は図書館を出ると駅前の方に向かう。思いの外足が速かったけれど、

白いポロシャツに白いズボンと白づくめの格好はひどく目立ったので追いかけるのは簡単だった。肩のところでも切り揃えたおかつぱのような髪も目印になった。大通りに出る。男の子が黄色の信号を駆け足で渡ったので焦ったがなんとか里菜も渡り切った。マクドナルドの前を過ぎてショッピングモールを抜けてエスカレーターを下る。ちよっとこれって——案の定男の子は雑居ビルの角を曲がった。里菜が後をつけていることに気付いてる——あの抜け道を使って巻くつもりだ。里菜は足を速めた。角を曲がると男の子は丁度鉄の扉をくぐるところだった。重い扉は男の子がくぐり抜けるとゆっくり戻ってくる。ちよつと待って——里菜は駆け寄ると閉まる寸前の扉を勢いよく押し戻してくぐり抜けた。

風が里菜の頬を撫でた。若草の柔らかい匂いとその風に乗ってやってきて里菜の鼻をくすぐる。ここは——どこ？草原が緩い起伏を描きながらどこまでも続いている。そこに干し草の山が積まれていて空の高いところでひびりが鳴く声がある。すぐ後ろで扉が閉まる音がした。はっとして、里菜は振り返った。あの古ぼけた扉が草原にぽつんと立っていた。一瞬いやな予感がしたが扉が蜃気楼のように消えることはなかった。里菜の足元から細い土の道が丘の上に向かつて伸びていた。このまま扉をくぐって戻ろうかと考えたけれど、なんとなく癩なのでとりあえず丘の上まで行ってみることにした。丘を上りきると

——眼下にその白い建物が見えた。なんだかギリシヤの遺跡が新品になったみたいな建物だ。そう思いながら里菜は丘を下って建物に近付いた。建物の正面扉の脇に木の札が下がっていてこう書かれていた。

続編図書館

やっぱり——どういうわけかそんな予感はしていた。あるはずがない『続・ディアフォレストの風』を見かけてから、不思議な技を使う男の子と出会ってから、鉄の扉の向こうの不思議な草原に足を踏み入れてから、桃ちゃんが言っていた秘密の図書館に辿り着いてしまうのではないかと。

どうしようかな？鉄の扉はすぐそこだ。これ以上深入りする前に帰ってしまったのが賢いように思えた。でも……。

里菜はキュツと唇を噛んで白い扉を睨むように見つめた。ここで帰ったら何も分からないままだ。この図書館のことも、あの男の子とも、あるはずのない『ディアフォレストの風』の続編がなぜ町の図書館に置かれていたのかも。

なんだかこのまま物語が終わるのは嫌だ。もっともっと続きが読みたい。ふとさつきまで読んでいた『ディアフォレストの風』の場面が里菜の脳裏をよぎった。

「我が友、風の精霊シルフィード、我と共に来たりて我を助けよ」

シンシアが叫ぶ。舞うように足を躍らせ稲妻のように腕を閃かせる。彼女の指先から幾本もの竜巻が沸き起こり屈強なオークやドワーフ達を切り裂き、なぎ払った。それでも後から後から武器を携えた軍勢が押し寄せてくる。

「キリがないぜ」

大剣を振るって追撃していたナオヤが息を切らせながら叫んだ。代官カミュの後ろ楯を得たゴルドバの軍勢は数百に膨れ上がっている。とても一つの村で防ぎきれぬ数ではない。

「シンシア、ナオヤと共に教会へ行け。あそこは聖域だから奴らも近付けん」
村長のヨハンが駿足のカヤを引き回して来た。

「でも、父様……」

傷つき疲れ切っている村人達を見遣ってシンシアはためらった。

「奴らの狙いはお前とお前の持っているブルー・ルビーだ。行くんだ」

迷っているひまはない。シンシアはあぶみに足を掛けると素早くカヤにまたがった。

「ナオヤ、騎って」

差し出されたシンシアの手につかまりナオヤもシンシアの後ろにまたがる。『ハイッ』シンシアの掛け声とともにカヤは走り出した。行く手を阻むオーク達はシンシアのつむじ風が道を開き、側面から斬りかかってくる奴はナオヤが

なぎ払った。

村の外れを出て荒野を走り始めると追手の姿も消えた。

「あいつら鈍足だからもう大丈夫だよ」

安堵するシンシアをあざ笑うように頭上から不気味な鳴き声が響く。『ガルだ』シンシアの声は震えていた。鷹のような爪を持ちハヤブサのように俊敏な怪鳥。代官カミュの尖兵だ。急降下してくるガルにシンシアは風の槍を放った。が、ガルは不敵に身をおろしながら二人に迫ってくる。

「カヤを止めろ」

シンシアが手綱を引いた。カヤの足が緩むとナオヤは転がるように飛び下りた。

「もう一度、風を撃つてくれ。……早く！」

体勢を立て直すと背負っていた洋弓を抜きながらナオヤが叫ぶ。シンシアが風の槍を放つと同時にガルの動線を読んでナオヤは矢を放った。

ギヤウツ

風の槍から身をおろした先で矢をまともに喰らったガルは絶叫して墜ちてきた。二羽、三羽、墜ちていく仲間を見て残りは撤退していく。

「行こう」

ナオヤがカヤにまたがるとシンシアはあぶみを蹴った。カヤが再び懸け出す。

「すごい！ナオヤは弓もできるんだ」

シンシアが興奮気味に言う。

「子供の頃から家の道場で親父にしごかれっぱなしでさ。剣道がうざったかったんだ。で、当て付けにアーチェリー始めたらハマっちゃってさあ……」

「アーチェリーって何？」

「弓みたいなもんだ」

ナオヤの大雑把な説明にシンシアは小首を傾げた。二人の前に十字架を戴いた尖塔のある建物が見えてきた。『教会よ』シンシアはあぶみを蹴ってカヤを急かせた。

中庭に駆け込むと二人はカヤから飛び下りた。カヤをつなぎ止める手ももどかしく教会の中に転がり込む。振り向くと彼方に土煙が立ち上っている。シンシアは急いで櫺の扉を閉めた。

「ここは境界が張ってあるからあいつらは入って来れない。神父様はゴールドバを恐れてとつくに逃げちゃったから無人だけどね」

一息ついて入口近くの椅子に腰かけながらシンシアは言った。教会の周りをオーク達が包囲しているはずなのに不気味なくらい静かだ。

「で、これからどうすんだ？」

ナオヤの言葉はステンドグラスが割れるけたたましい音にかき消された。床

にこぶし大の石が転がる。たて続けにステンドグラスが割れて石が飛び込んでくる。

「奥へ逃げろ」

シンシアを先に走らせて祭壇に向かう。二人をせき立てるようにガラスが割れる音が鳴り響いた。

「結界張っても石は投げ込めるのかよ」

ぼやくナオヤの目の前で祭壇の天窓に影が差した。——ステンドグラスを割ったのは二人を祭壇に追い立てる陽動だったらしい。ナオヤが床を蹴るとガ
ルが落した岩が天窓を砕くのが同時だった。ナオヤはシンシアを押し倒すよう
にしてその体に覆い被さった。『ぐうっ』ナオヤの下でシンシアが呻いた。ナ
オヤの頭に腕に体に幾千の色ガラスが降り注いだ。

辺りが静かになってシンシアはナオヤを押し退けて体を起こした。『ちよつ
と……』と言いかけた彼女の表情が凍りついた。無数のガラスが突き刺さって
ナオヤの顔は血まみれだった。

続きが気になる——。早く帰って続きが読みたい。けれど今はそれどころじ
やない。里菜は白い櫛の扉を押して続編図書館に足を踏み入れた。

続編図書館は建物の中も真っ白だった。入ってすぐに左右に白い廊下が伸び

ていて、正面の白い壁に案内板がかかっていた。

→ 受付（会員登録はこちら） ←
← 一般書架

里菜は右手に進んだ。廊下を曲がったところに白いカウンターがあつて縁無し眼鏡をかけたおじさんが腰かけていた。おじさんはあのカードとおそろいの真つ赤なエプロンをしていて、エプロンの真ん中には今にも動き出しそうな小犬がこちらを見ていた。

「いらっしやい。初めてかい」

おじさんは人懐っこそうに笑った。

「はい。あの……。会員登録をしたいんですけど」

「これに名前と住所、電話番号を書いて。何か身分証はあるかな？」

「生徒手帳ならありますけど」

「それで良いよ。コピー取らせてね」

生徒手帳を受け取っておじさんは奥の部屋に入つて行った。何だか手続きが当たり前過ぎて里菜はあっけに取られた。こんなんで良えんかなあ？——渡された用紙に住所と電話番号を書きながら首を傾げる。こっちの世界でこんな情

報の使い道ってあるのんかな？

おじさんが戻ってきて生徒手帳を返してくれた。申し込み用紙を確かめると引き出しから白いリボンの付いた真っ赤なカードを一枚取り出した。あのカードだ。

おじさんはカードの上で指を滑らせた。指でなぞった跡に金色の文字で里菜の名前が浮き上がった。

「はい、図書館カード」

おじさんが手渡してくれたカードを里菜は両手で受け取った。カードの下にはあの小犬の絵が描かれていて里菜の胸は躍った。

「誰かに案内させた方が良いね。トナエ……、トナエ、ちょっと出て来てくれ」
おじさんは奥の部屋に向かって声を掛けた。『はい』と返事をしながら出て来たのはあの男の子だった。男の子もおじさんと同じ真っ赤なエプロンをしていた。

「あ、お前」

里菜を見て男の子は声を上げた。

「お客様に失礼な言い方をするんじゃない」

「クビキさん、この子あつちの世界の人間だよ。なんだって会員登録しちゃうんだよ」

クビキさんと呼ばれたおじさんはまじまじと里菜を見た。里菜は慌ててカードを持った手を背中に隠した。今さら取り返されたくない。

「おや、そうだったのかい。ま、登録しちまったもんは仕方がない。君はもうこの図書館の会員だ」

えらく大雑把な気もしたが、とりあえず里菜は胸を撫で下ろした。

「トナエ、この子に図書館を案内してやってくれ。それから規則の説明も頼むよ」

「新刊の整理で忙しいんだよ」

「口答えはしない。よろしくな」

言うとかビキさんはトナエの背中を押してカウンターの外へ追いやった。

「しようがないな。じゃあ、付いてきて」

クビキさんに向かって露骨に顔をしかめてからトナエは里菜に向き直った。嫌な顔されるんだろうな——里菜は身構えた。

が、意外なことにトナエの顔は怒ってもいないし、笑ってもいなかった。無表情——って言うのかな？トナエは里菜を促して廊下を歩き出した。里菜達は来た道に戻って一般書架と書かれた札が付いた入口を抜けて行った。

「うわあ」

里菜は思わず大きな声を立ててしまつて慌てて両手で口をふさいだ。一体ど

れだけの本があるんだろう。まるで本の海だ。立ち並んでいる書架がどこまで続いているのかわからない。はるか向こうの方の書架は高層ビルのとっぺんから道路を走る車をみるように小さくかすんで見えた。それでもその向こうにまだ書架は続いている。

「まずこの図書館の特徴から説明します」

トナエがいきなりしゃべり出した。

「ここにある本は全部、そちらの世界にある物語のまだ生まれていない続きの話です。単独の物語なら続編。もう続編が出ている物語ならそのまた続編。シリーズ物なら最新作の次の物語です」

「ねえ、なんか怒ってる？」

里菜が話に割り込んだ。

「なぜ、そう思うんです？」

トナエがちよつと驚いたような顔をした。

「だってさ、なんかコンピュータがしゃべってるみたいだし」

「ぼくはいつもこういうしゃべり方です」

トナエはそれこそ怒ったように言った。町の図書館で里菜に捲くし立てた口調の方が特別なんだろうか？

「説明を続けます」

あくまでもマイペースでトナエはまた話し出した。

「ですから、ここにある本の数はそちらの世界の物語と丁度同じ数になります。いつかこちらの世界の物語がそちらの世界で生まれればその本はここの書架からなくなりますが、同時にその続きの物語が生まれます。だからここの本の数は減ることはなくて、そちらの世界で新しい物語が生まれる度に増えていくのです」

理屈はなんとなくわかったけど、聞いていて里菜は数字に酔いそうになった。「じゃあ、ここの本の数が減ることは絶対にならないの？」

「いえ」

トナエはこともなげに首を振った。

「元の物語が消えてしまえばここの本も消えます」

「物語が消える？」

「考えてもみて下さい。千年前に生まれた物語が今も全部残っているわけではありません。語られなくなったり、忘れられたり、火事や戦争で本が燃えてしまったり、長い時間が経てば消えていく物語の方がずっと多いのです。元の物語が消えれば、その続きの物語も消える。だからこの図書館の蔵書の数は案外にかわらないんです」

「じゃあ、結局わたしの世界で生まれずに消えちゃう続編もあるのん？」

「というか、ほとんどの続編は生まれることなく消えていくのです」

トナエはきまじめに答えた。

「次に、ここにある間、本の中の物語は定まりません。絶えず変わり続けているのです」

「どういうこと？」

「たとえば、ある日『続・桃太郎』という本を開いたら桃太郎が新たな敵から村を守る物語が書かれているかも知れません。でも、次の日に同じ本を開くと桃太郎が都に上って出世する話になっていたりするのです。元の物語に対する読者の想い、続編に対する期待、その時々^{その}の時代背景や世相、そういったものの影響を受けて続編の物語は変化し続けます。そして、そちらの世界で生まれた時、初めて物語は定まるのです」

夢中でしゃべっていたトナエは、はっと我に返ったような顔になった。

「話がちよつと横にそれましたね。この図書館の利用ルールを説明します。一般書架にある本は閲覧自由です」

「ちよ、ちよつと待って」

里菜は慌てて説明を遮さえぎった。

「閲覧自由って言うても、この中から桃太郎の続編を探すのはかなり無理があると思う」

「ご心配なく。そのために図書館カードがあるので」

「ねえ、やっぱり気になるねんけど、その係の人みたいな口調はなんとならんの？」

「そういわれても、ぼくは係の人ですから」

表情を変えずに言うトナエに里菜は肩をすくめた。話に割り込むとよけいにややこしくなりそうだからとりあえず話を聞こう。

「この犬の絵に向かって元の本の題名を言って下さい」

トナエは小犬に向かって『桃太郎』と言った。すると小犬はカードの中で背を向けて駆け出して行った。小犬の姿はすぐにごま粒ほどに小さくなって消えカードは赤一色になる。しばらくすると本をくわえた小犬が戻ってきた。元の位置に戻ると小犬は軽く首を振った。本がカードから飛び出してトナエの手に載る。本の表紙には『続・桃太郎』と書かれていた。

「返却」

トナエが言うると本はカードの中に吸い込まれた。小犬は跳び上がったそれをくわえると駆け出していく。駆け戻ってきた小犬はひと鳴きしてまたちよんと座り込んだ。

「うわっ可愛い。やってみたい」

「閲覧は館内のみ。持ち出しは禁止です」

「ちよつと、人の話聞いとらへんやろ」

「利用時間は午前九時から……」

「人の話を聞けって」

里菜の抵抗むな虚しくトナエは案内を続けた。

「……以上。何か不明なことがありますたら受付までどうぞ」
言い終えてトナエは背を向ける。

「ちよ、ちよつと待って」

里菜は慌ててトナエを呼び止めてポケットからチョコレートを取り出した。

「お近づきのしるし」

「館内での飲食は……」

「堅いこと言わんの」

包み紙をはがすと小さな粒をトナエの口に押し込んだ。トナエは目を白黒させたが、口の中でチョコレートが溶けだすとうっとりとした目になった。それを見て里菜はにっこりと笑った。

トナエが戻って行って一人になる。人のいない図書館は深い森のように静かだった。里菜はポケットからカードを出してさっそく試してみた。

「桃太郎」

小犬がカードの中を駆けて行く。指先からさっきのチョコレートの匂いがし

て、今朝食べたチョコレート・シフォンの味を思い出した。本をくわえて小犬が戻ってくる。ふかふかの毛並みがシフォンケーキみたいに見えた。シフォン——よしこの子の名前はシフォンにしよう。そう決めた時、里菜の手の上に『続・桃太郎』が載っていた。

窓際の席に座って里菜はさっそく読んでみた。桃太郎に壊滅的な打撃を受けた鬼の一族は鬼ヶ島を再建しながら復讐の機会を窺^{うかが}っていた。そして二十年の歳月が流れた。村の様子を探りに来た鬼の若頭領は美しい村娘と恋に落ちる。しかし、その娘こそあの桃太郎の一人娘だったのだ——。

なんかベタな展開やなあ。村の長老に収まった桃太郎は頑固爺さんの見本みたいで悪者っぽいし。元の話の方がシンプルで良えかも。

次々に本を取り寄せては読んでみる。『続・フランダーズの犬』——ほんまにあるんやと思いつつながら里菜は本を開いた。美しく成長したアロアは村の青年に求婚されるがネロの死が未だに負い目となっていて自分だけ幸福になることをためらう。そんな折、ネロが描いていたコンタールの絵が高名な画商の目に留まって——って、オリジナルとは別の話になってるし。まあ、ネロが生き返るよりはマシかな。

いやいやいや、もう少し無理のない続編があるだろう。里菜は今まで読んだ本を思い出そうとしたが意外に思い出せない。読み終えた時には主人公達と、

もつと同じ時間を過ごしたいと思った本がたくさんあったはず。名残惜しくて何度も読み返した本があったはず。ええと、いざというとなかなか思い出せないなあ……。あつ、一つ思い出した。

「ぐりとぐら」

シフォンがカードの中を駆けて行く。駆け戻ってきたシフォンがくわえていたのは『ぐりとぐらのおたからさがし』という題名だった。海に出かけたぐりとぐらが宝の地図を拾う。それに導かれて海底に沈む海賊船を探検する話だ。すごい。本当に読んだことがない新作だ。里菜は夢中で読み進んだ。懐かしい――。最後に見付けた宝物が『とくべつなカステラのレシピ』というのも、ぐりとぐららしくて里菜は思わずにやにやした。

なんだかすごく得をした気分だ。食べ尽くしたと思っていたビスケットの箱を覗くと、まだまだビスケットが残っていたような気分。

次は何を読む？自分に尋ねながら気が付くと手の平に少し汗をかいていた。「シャーロック・ホームズ」

最近ちよつとハマっているシリーズの名を告げた。シフォンが一冊の本をくわえて駆け戻ってくる。里菜の手に『シャーロックホームズの潜伏』という本が現れた。作者はアーサー・コナン Doyle になっている。もう死んじゃった人なのはどうやってあっちの世界で生まれるんだらう？あとでトナエに訊いて

みようかな。

背表紙の粗筋を読むと、モリアーティ教授と対決後、復活するまでの事件を後にワトスン博士が聞き書きした物語という形式らしい。『注文と違う料理が出てくるのに文句を言わないレストランの客』、『ハイドパークで連続して起きる鳩の射殺事件』、『キュー植物園に隠された莫大な遺産のありかを示す暗号の謎』といった煽り文が躍っている。全部で六編——どれもおもしろそうやん。里菜は窓辺の椅子に本腰を入れて座り込んだ。誰も知らない物語——それを世界で一番最初に読んでいると思うと胸が躍った。

おなが——空いた。気が付くとお昼をとうに過ぎている。名残惜しいけどそろそろ帰らなきゃ。

「返却」

と唱えるとシャーロックホームズはカードの中に吸い込まれた。次は何を読む？ぼんやりとそんなことを考えていたらシフォンの鳴き声に驚かされた。なんや中毒になっちゃってしまえそう。

一般書架を出ると受付に回ってクビキさんに『帰ります』とあいさつをした。

「帰り方はわかるね。あの鉄の扉がこつちとあつちをつないでいるから。こちらに来る時はあの扉に図書館カードをかざしなさい」

クビキさんが本の整理の手を止めて教えてくれた。里菜はお礼を言って図書

館を出た。『あっ』丘を上ったところで里菜は声を立てた。トナエにあいさつしそびれたな。足元には鉄の扉が見える。振り返れば続編図書館の白い姿が午後の陽差しにくっきりと浮き上がっていて草原に濃い影を落していた。それを見ているとくしゃみがひとつ出た。

とうに陽は落ちて割れた天窓から月の光が差し込んでいる。ガルは鳥目だからとりあえず、空襲の危険は去った。長期戦に持ち込むつもりだろう。見張りを残してオーク達も撤退したようで唸り声も消えている。

「ごめん」

シンシアがぼつりと言った。ナオヤはシンシアの膝に頭をのせてじっと目を閉じている。

「……じゃなくて、助けてくれてありがとう」

シンシアが言い直す。その肩が震えていた。

「ごめん……」

ナオヤが口元だけで笑った。

「今度はどうした？」

「わたしヒーリングの魔法の勉強をサボってばかりいたから、ナオヤの傷を治せない」

ナオヤの笑みが深くなった気がした。

「もう少しこっちに来て」

シンシアは体をずらせてナオヤの体を引き寄せ天窓の真下に顔がくるようにした。

「顔を見せて」

青白い月の光に照らしてシンシアはナオヤに顔を近付ける。それから傷口に目を凝らすと用心深くガラスの欠片かけらを引き抜いた。ひとつ、またひとつ、気が遠くなるような数の欠片をシンシアは引き抜いていく。

「動いちやだめ」

痛みに顔を背そむけようとするナオヤの顎を強い力で摘つまんでシンシアが言った。ナオヤがそっと目を開くとすぐそこに怖いほど真剣な眼差しの緑の瞳があった。

「痛いたっ」

声を上げてシンシアが指を唇に当てる。指の先から赤い筋が細く伝っていた。ガラスで指を切ったのだろう。

「もうよせよ。筋を切ったらリユートが弾けなくなるぜ」

「いや、止めない」

シンシアは目尻に涙を浮かべながら、それでもガラスの欠片を抜き続けた。

放課後、ピアノのレッスンがない日、土曜日や日曜日、里菜は時間を作っては続編図書館に通い続けた。手提げかばんの中には『読みたい続編リスト』が入っている。家の本棚や学校の図書館の本とにらめっこしながら作ったのだ。貸し出ししてくれたら良いのにな——図書館の限られた時間で読める量はわずかだ。どうしたって読みたい本を厳選する必要があった。

それでも里菜は一冊、また一冊、懐かしい物語の中の人々と再会を果していた。せいたかさんとおちび先生。ジュディとジャービス。もう会えないと思っていた彼らと新しい物語を思い切り満喫できた。続編図書館には映画のライブラリもあったので、少し大きくなったさつきとメイちゃんにも会うことができた。

『ここにある間、本の中の物語は定まらない——トナエの言葉を思い出して『ぐりとぐら』をもう一度取り寄せてみた。シフォンがくわえて来た本は『ぐりとぐらのあまやどり』という題名で前とは違う物語だった。もしかして、無限に新しい物語が出てくる？ なんだか怖くなって他の本ではまだ試していない。

桃ちゃんを連れて来ちゃだめかな？ クビキさんには確かめていないが初めて来た時のトナエの口振りから里菜の世界の人間は本来会員になれないみた

いだ。でも、桃ちゃんは里菜の親友だし、何より続編図書館の噂を最初に聞いてきたのは彼女だ。クビキさんに相談してみようと思いつきながら言いそびれていた。

会員といえば里菜は図書館の中で会員の姿を見たことがなかった。立ち並ぶ書架の間を本をくわえた小犬が駆けて行く姿はよく見かける。だから、広大な書架の森のどこかに小犬を待っている会員がいるのは間違いないらしい。けれど何度追っても見失ってしまつて犬達のゴールがどこなのかはさっぱりわからなかった。だからその会員達が里菜と同じ人間なのか、まるで違う『何か』なのかもわからない。たとえば布のように薄っぺらで幽霊みたいに向こうが半分透けているような『何か』が書架の間でゆらゆら揺れながら本のページをめくっているかもしれない。そんな姿を想像すると不気味でちよつと怖かったけれど、この図書館はいつ行つても午後の陽差しがいっぱいに差しているのでもんな姿でさえユーモラスに見えるような気がした。

その日、里菜が続編図書館に行くとトナエが受付に座っていた。

「こんにちは」

トナエの口調は穏やかだけど、相変わらず受付の人みたいで他人行儀だった。「ねえねえ、この会員ってあっちの人間はわたしだけなん？」

「会員の個人情報に関するご質問は……」

「あんたはコンピューターか。あ、そや」

里菜はポケットから丸いボール型のチョコレートの一つ出してカウンターに置いた。

「これでどうよ」

「ですから、館内での飲食は……」

里菜が指先でチョコを弾く。『あっ』トナエは思わず声を上げてカウンターから転がり落ちそうになったチョコをキャッチした。

「はい、受け取った」

「ちよつと……」

手の中のチョコと里菜を交互に見ながらトナエはあたふたした。里菜はポケットからもう一つチョコを出して口に放り込んだ。

「ええと、他にも里菜さんの世界の方の会員はいらっしゃいます」

トナエは口をとがらせて抗議しようとしたが、やがて諦めたように溜息を一つつくとそう言った。

「本来は会員登録しない規則なのですが、里菜さんと同じようについっかかり登録してしまうことがあるんです」

「あの……。友達とか連れて来たらだめ？」

「規則ですから」

チョコを口に入れながらトナエの答えはにべもない。

「じゃあせめて本の貸し出しできへんかな？」

「とんでもないです」

トナエの声が裏返ったので里菜は驚いた。

「あっちの世界にこっちの本を持って行くのは……」

「え？どうなるの？」

その時、奥でトナエを呼ぶクビキさんの声がしてトナエは慌てて立ち上がった。

「とにかくダメです。それより里菜さん」

トナエは『ご用の方はベルを鳴らして下さい』という札を立てながら言った。

「続編の読み過ぎには注意して下さい。良くないことが起きますよ」

「えっ？」

聞き返そうとする里菜に急いで会釈してトナエは奥の部屋へ消えた。その中途半端な警告はチョコの仕返ししかいっ？里菜は心の中でそう呟いた。

「というわけで、平清盛たいらのみきよもりが始めた平家の政権は壇ノ浦だんののうらの合戦で安徳天皇あんとくてんのうが亡くなることで終わりを迎える。平家物語の最後もこの場面で締め括られるわけやが……」

先生が教室を見回すと皆いっせいに首をすくめた。先生の真っ直ぐに伸びた指は——里菜を指した。ついてないと思いつながら里菜は起立した。

「平家物語全体を通して流れるテーマを四字熟語で表すと何や？」

「ええと……、臥薪嘗胆だと思えます」

臥薪嘗胆は復讐のためにつらい試練を我慢したり、目的を達成するために苦労や努力をする意味の四字熟語だ。平家と源氏の争いを考えるとぴったりに思えた。先生は里菜の答を吟味するように小首を傾げて『うーん』と唸った。

「源氏の視点からみればそう言う考え方もあるな。けど、タイトル通り平家が主役の物語と考えると別の熟語になるんじゃないか？」

「でも、安徳天皇が壇ノ浦で亡くなったというのは偽装でした。安徳天皇は実はモンゴルに逃れてチンギス・カンと協定を結び、その息子がフビライ・ハーンを名乗るんですよね。そのフビライがやがて元寇を起こして鎌倉幕府に反撃するわけですから、これは源氏と平氏にとっての臥薪嘗胆と考えるのが……」

クラス全体が妙に静かになった。そこ、ここで、かすかに笑い声が聞こえる。里菜は急に心細くなってきて語尾が尻すぼみになった。

「ファンタジー小説か何かの読み過ぎちゃうか？平家物語の話やで」

「え、ですから平家物語と……あっ」

里菜の答には続編のストーリーが混ざっていることによろやく気付く。オリ

ジナルのストーリーって安徳天皇が亡くなって終わるんだっけ？

「あっ、ああ、もしかして『諸行無常』か『盛者必衰』だと思います」

「もしかせんでも、その二つが正解や。はい、座って良し。……三十七頁開いて」

先生は話をまとめて授業に戻った。

「やっぱ人魚姫やて」

桃ちゃんが言う。

「一途さで言うたらダントツやん。愛する人のそばにいるために自分の声を捨てるわ、その愛する人が別の女性と結婚するのに、殺すこともできずに海の泡になってしまいうやなんて。純愛のきわみちゃう？」

「けど……」

里菜は写生の手を止めずに口を開いた。桃ちゃんは絵筆を止めて身構えた。

「したたかな一面を見せてたやん。王子の三人の子供達は全員海の泡に吞まれて溺れ死んだわけで。やっぱり人並みの嫉妬心も……」

言いかけて里菜は『あっ』と声を立てた。

「い、今のんなしな」

「って言うか、里菜ちゃんこの頃おかしいで。社会の小テストでも変な答書い

て点落したみたいやし……」

「ちよつとしたミスや。気にせんといて」

「いや、なあんか良くないもんに取り憑かれてるんちゃう？心配やねんけど」と言いながら都市伝説好きの桃ちゃんは嬉しそうな目で里菜を見た。

「そんなことないから」

言いながら里菜は心で冷や汗をかいた。世界で自分しか知らない物語だ。続編図書館の本に書かれていることを口にしても他の人にとっては里菜の妄想でしかない。このままあそこの本を読み続けたら、ますます小説のストーリーがごちゃ混ぜになってとんでもないことを口走りそう。まずい！それってただの危ない人やん。トナエが行っていた『良くないこと』とか『読み過ぎには注意』ってこれのことだったんや。しばらく——続編図書館に行くのはやめとこう。里菜は自分にそう言い聞かせた。

「そう言えば『デアアフロレストの風』は読み終わったん？」

桃ちゃんはふと思いついたように訊いてきた。

「もうちよつと。教会を脱出したナオヤとシンシアが大聖堂に僧兵の援軍を派兵してもらおうように直訴するところまで来た。仲間の裏切りでゴルドバに待ち伏せされるとこ」

「お、いよいよクライマックスやな。シンシアはさらわれるし、ナオヤは木に

縛られてコヨーテの餌食に……という場面やろ」

「桃ちゃんは絵筆を黄色いバケツに突っ込み、パレットに緑の絵の具を伸ばした。」

「このままナオヤはコヨーテが美味しく頂きました——という結末やったらどうする？」

「あのなあ、それではお話にならんやん」

「へえ、里菜ちゃんでもそう思うんや」

「『でも』って何よ。『でも』は止めて。けど、ホンマにそんな結末やったりして。で、シンシアはゴールドバと年の差結婚するねん」

「げ……。それやったら、続編の主人公はゴールドバとシンシアやな。女盗賊シンシアとか」

「ないない。別の話になってるし」

「わからへんで。案外、続編図書館にやったらそんな本があるかもしれへん」

「桃ちゃんのその一言は氷水こおりみずのように里菜の心を一気に冷やした。背中にじわっと汗が伝い落ちた——気がした。」

あるのだ。本当に続編図書館ならそんな物語もあり得るのだ。穏やかな陽差しの差す白い窓辺が脳裏に浮かぶ。長閑のどかな情景のはずなのに、里菜はその窓辺がなんだか怖くてたまらなくなった。

肌を刺す夜の冷気に身震いしながらナオヤは干し草の山を登った。登り切ると不意に視界が開ける。たった二メートルばかりなのに渋谷の高層ビルより見晴らしが良い。月はなかったが星明りがこんなにも明るいことをナオヤは初めて知った。遠くに森の木々の濃い影が見える。左手の牛舎も今は静かに眠っていた。夜明けにはまだ少し時がありそう。そのまま体を倒して寝転がる。見たこともない数の星々にナオヤは息を呑んだ。星が降りかかって落ちてきそう

だ。
静かだな――。

東京育ちのナオヤは車や雑踏の音がしない世界を知らない。やたら虫の声が耳につく。遠くで川の流れる音まで聞こえてくる。

不意に強い風が吹き上がり、干し草に鼻をくすぐられてナオヤは派手なくしやみをした。足元で笑い声が起る。

「あにすんだよ」

ナオヤが足元に向かって文句を言うと、シンシアは身軽によじ登ってきてナオヤの横に腰を下ろした。

「何してたんだよ」

ナオヤの口真似でシンシアは言い返した。二人は干し草の上に引っ繰り返

てしばらく笑った。

「ゴルドバがいなくなったらなんだか気が抜けちゃった」
シンシアがぼつりと言う。

「ああ」

二人が黙り込むと草のざわめきや川の流れる音がやけに耳についた。

「いよいよ、今日だね」

「……ああ」

言ったとき二人はまた黙り込んだ。

「心配ないよ。キルト様はカミュを破った程の魔道師だもの。きっとナオヤの世界に続く道を開いてくれる」

「俺は……、帰って良いのかな」

「良いに決まってるじゃない。ナオヤのふるさとだよ」
言ってシンシアは笑った。

「いや、そういうことじゃなくて……。つか、普通もうちっと名残惜しそうにするとか、『行かないで』ってすがり付くとかあるだろ」

ナオヤは不貞腐れたようにシンシアに背中を向けた。不意にぐっと肩にしがみつかれて、背中にシンシアの体温を感じた。

「行かないで」

消え入りそうな声が耳元で響いた。

「なあんてさ。言うと思う？」

シンシアは仰向けあおむけにひっくり返ってけらけら笑った。『柄がらじゃないよ』と呟く。

「あのさあ」

「ん、なに？」

「背中が濡れちゃって冷たいんだけど」

シンシアは顔を背けると小さな声で『ばかっ』と言った。

「あのさあ」

ナオヤはシンシアの方に向き直った。シンシアはすねたように背中を向けている。

「一緒に行かないか」

シンシアの肩が震えた。

「ちゃんと親父にも紹介してこれからのことを相談する。どうやって暮らしていく気だって訊かれてもまだ答えられないけど必ず答を出す。俺、シンシアに傍そばにいてほしいんだ」

言っいってナオヤは仰向けになると星空を見上げた。幾千万もの星々を眺めていと二人のこれからの暮らしの悩みなど他た愛あいないことのように思えた。シンシ

アは黙りこくっている。ひんやりと冷たい風が干し草の上を幾度も吹き過ぎて
ナオヤは大きく身震いした。

「じゃあ、ナオヤがここに残りなよ。父さんにきちんと話す。ナオヤがここで
暮らしていけるようにする。わたしだって……」
強い風に紛^まれ^かれてシンシアの言葉はかき消された。

あと一冊だけ。

里菜は心の中で呪文のように唱えた。

あと一冊だけ——こんな終わり方はいやだ。最後の最後にあんな呪われた運
命が待っていたなんて……。

もうしばらくは行かないでおこうと思っていたが、里菜はまた丘の上に立っ
ていた。見慣れた白い建物は今日も濃い影を落としていた。

櫛の扉を押して入ると見慣れた案内板の下に張り紙がしてあった。

『図書館カードの更新を行います。まだの方は受付までお越し下さい』

締切日は今日になっていた。あとで行こうと心に決めて一般書架に急いだ。
ポケットから赤いカードを取り出すと何となくシフォンの頭の辺りをなでて
から本の題名を唱えた。

「ディアフオレストの風」

シフォンが——駆け出さない。小首を傾げるともう一度言えと催促するよう
に短く吠えた。どういうこと？

「ディアフォレストのかぜ」

今度はゆっくり言ってみた。シフォンが後ろ足で頭をかいて、また短く吠え
た。

「でいあ、ふお・れ・す・と・のおかあぜ」

なんだかからかわれているみたいで、いらついたのでつい声が大きくなった。
と、シフォンが足元を掘る仕種をした。木の立て札のイラストがぬっとシフォ
ンの前に現れた。

『おそれいますが、受付までおこし下さい』

立て札には赤い文字でそう書かれていた。しばらく里菜はじっとカードを眺
めていたがそれ以上は何の変化もない。とりあえず受付に行かなければならな
いらしい。

受付のカウンターにはトナエがいた。そしてカウンターの上にはいつか町の
図書館で見かけたあの本——ここへ来るきっかけになった『続・ディアフォレ
ストの風』が置いてあった。

「あの……」

里菜はカードを差し出して説明しようとしたが、黙ってうなずくとナエを見

て事情は全部伝わっているらしいとわかった。

「この本、覚えていますか？」

トナエに尋ねられて里菜は黙ってうなずいた。口調はいつもと変わらないのだが、心なしか厳しい表情をしているように見えた。

「この本はクロード・ブックになったのです」

『クロード・ブック』 Ⅱ 『閉じた本』 ってどういう意味だろう。カウンターの上の本はよく見ると細い金色の糸で何重にも縛ってあつて簡単に開かないようにしてあつた。

「この図書館がどうして生まれたかわかりますか？」

里菜は首を傾げた。里菜の住む世界とは異なる空間に建っているのだろうと想像するだけで、この図書館ができた理由や意味など深く考えたことはなかった。

「そちらの世界の人達が物語を手に取ります。読み終わった後、物語はその後どうなったんだろうと想像を巡らせませす。想像の中身は読んだ人の数だけ様々です。その想像を整理して一つの物語にまとめるためにぼく達が生まれました。そして、まとめた物語を仕舞っておく場所としてこの図書館が生まれたのです」
「なんだか物置か倉庫みたいだ。」

「新しい読者が現れれば新しい想像が生まれる。同じ読者でも時が経てばまた

別の想像をすることがある。ここの物語はいつかそちらの世界で生まれるまで、
そういった新しい想像を呑み込んでその姿を刻々と変えていくのです」

言ってトナエはカウンターの上的本を見遣った。

「今さらやけど、トナエってむちゃくちゃ長いこと生きてへん？」

里菜がおそろおそろ訊いた。

「ぼく達に時間の概念はありませんから」

トナエはこともなげに言った。

「何が起きたら続編がそちらの世界で生まれると思えますか？」

「そりゃあ小説が大ヒットして、出版社が会議で続編を作るかどうか決めて：

…」

トナエがくすくす笑い出したので里菜は驚いた。もしかしたら、笑うのを見るのは初めてかもしれない。

「みなさんほんとに……。ほんとに同じことをおっしゃるのですね」

笑いはなかなか引っ込んでくれないらしく、トナエは苦しそうな顔をしながら言った。

「もっと単純なことです。この図書館の本をそちらの世界に持ち込んで開けば
良い」

「それだけ？」

「はい、それだけ。開いた瞬間にその本は消えて、そこに書かれていた物語が作者に宿ります。出版社は自然と続編を作る準備を始めるのです」

「いやいやいや、魔法やないんやから——口まで出かかって止めた。この図書館自体が魔法みたいなものだ。」

「この本がそちらの世界の空気に触れると続編の物語は変化するのを止めます。そして、本を開いてしまったらもう後戻りはできなくなります」

続編が生まれるのです——。

「だから貸し出しできなかつたんだ」

里菜の言葉にトナエはうなずいた。

「でも、どうしてこの本があつちの図書館にあつたの？」

金色の糸で縛られた本を見つめながら里菜はさつきから気になっていることを尋ねた。

「タチの悪いいたずらです。こちらの本をこっそり持ち出して、大勢の人目に触れる図書館や本屋に置く人がいるんです。誰かが知らずにその本を開いてしまふのを見て笑うらしいのです」

「くつらあ。何の得にもならへんやん」

「それどころかまだ生まれるべきでない続編でそんなことをしたら物語世界の秩序が乱れます。下手をするとオリジナルの物語世界が崩壊してしまいます」

平家物語や人魚姫を思い出した。あの本が実際に出版されたら読んだ人はどう思うだろう。そういえば有名な小説の続編が出た時、作るべきじゃなかったと強く批判されたこともあった。あれはもしかして、そうやって無理やりに作られた続編だったのだろうか？

「本来、物語は一冊で完結するものです。たとえば続編が作られたとしても、それは前の作品とは全く別の物語として語られるべきです」

トナエは疲れたような溜息を吐いた。

「この仕事をしているといろいろな声が聞こえてきます。この本の続きが読みたい、あの本の続きが読みたいって、そりゃ熱心に望む人がいます。ところがいざ続編が出ると、がっかりした声が聞こえてくるんです。一作目と雰囲気が違うとか、こんな展開になるとはおもっていませんでしたとか、ストーリーの質が落ちている、感動が薄れた、設定に矛盾がある、登場人物の性格が違っている——とどのつまりは前作を超えられていない」

「いやいやいや、そんな意見ばかりじゃありませんよ。喜んでくれた人もたくさんいたんじゃない？」

里菜がとりなしたが、トナエは眉間まへけんにしわを寄せたままだった。

「もちろん励みになる声もたくさん聞こえますが、理解に苦しむのは否定的な声です。たとえばお気に入りの登場人物が死んでしまったって悲しんでいた人が、

実は死んでいなかったという話にして下さいと願うことがあります。ところが、続編で実は死んでいなかったという筋になっていると急に怒り出すんです。ご都合主義だって。その人はいったいどんなストーリーだったら満足するのでしょうか？」

トナエには悪いと思いつながら里菜はその人の気持ちがあんまり理解できず。思い入れの深い登場人物には死んでほしくない。でも、その生死を安易に扱われるのはもつと耐えられない。ファンってそういうものやし。

「すみません。取り乱したことを言っただけです。済みません」

「良えやん。なんか初めて人間臭かった気がするし」

笑って里菜はかばんからさっき買ったチョコレート箱を出して封を切った。トナエは肩をすくめて素直に差し出された箱から一つつまんだ。

「どうしてみなさん続編を読みたがるんでしょう？」

「それは……、その物語が好きだからやん」

言って里菜はドキリとした。当たり前過ぎる答だったのでトナエが怒るか笑うかと思ったのだ。けれど、トナエは黙って続きを待っているようだった。背中を押される気持ちで里菜は続けた。

「本を読んでいると特別な一冊に出会うことがあるんよ。読み始めたら周りから音も光も消えて代わりに物語の世界が立ち上がってくる。干し草の香りも、

風の音も直に肌で感じられるくらい感覚が現実味を帯びて、主人公達の笑い声や叫びが耳元で本当に聞こえる気がするところがある」

里菜はチョコレートをひとつつまんだ。

「けど、それは夢なん。本を読み終わったら一瞬で消えてしまう夢やねん。そんなことわかってる。わかってても……いや、わかってるからこそ、ページがあと少しになってくると息が苦しくなるんよ。もうすぐお別れや。最後のページを閉じたらこの世界の時間は止まって先に進むことはなくなる——そんな思いが現実味を帯びてくるから」

チョコにくるまれていたナッツを噛む。カリッと大きな音がした。

「その本を読み返すことはできる。けど、何回読んでも同じ時間を繰り返すだけで、だんだん味気なくなってくる。新しい時間を新しい物語を味わいたいと思うようになるやん。だからたくさんの人が続編を読みたがるんやと思う」

トナエはじつとカウンターの上的本を見つめて黙っていた。奥にクビキさんがいるんだろうか？本を積み重ねたり、ワゴンを動かしたりする音が聞こえてくる。

「この本はクロード・ブックです」

首を傾げる里菜にうなずいてトナエは続けた。

「そちらの空気に触れてしまったから、今ここで封を切って本を開いた瞬間、

そちらの世界で続編が生まれません」

だから、一般書架には置かず封をして保管してあるのだという。

「そちらの世界の空気に触れた時点で物語は変化することを止めていますから、本を開く前からどんな物語になるかは既に決まっています。でも、本を開かない限り誰もその物語を知ることはありません。一人一人の読者が自由に想像する余地が残っているのです。本を開けば——大げさな言い方になりますが、オオヤヤシンシアの運命は決まってしまう。その覚悟があるならどうぞ封を切って下さい。里菜さんにはその権利と資格があります」

『どうということ？』と里菜は尋ねた。

「あの日、里菜さんがこれを見付けてすぐにぼくに報せてくれたからこの本は生まれずに済みました。『ディアフォレストの風』は発売から一カ月しか経っていない新刊書です。この作者のファンなら注目度も高い。早々に誰かの目に止まってもおかしくはなかった。あんなに早く回収できたのは里菜さんのおかげです。だから里菜さんが本を開いても構わないと思うのなら開く権利があります」

トナエはカウンターの上の本を指で叩きながら続けた。

「そして、里菜さん自身もあの時この本を開けなかった。この物語に興味を持っていて開いてみたいという誘惑もあったのにととうとう開けなかった。安易な

好奇心に打ち勝てたあなたにはこの本を開く資格があります」
聞いていて里菜はこそばゆくて仕方がなかった。いやいや、開かなかったのは本をバサバサ落してしまってたまたまなんやけどな。

トナエは『続・ディアフォレストの風』を里菜の方に押しやった。

風使いのシンシア、剣道とアーチェリーの達人の直也、二人の新しい冒険の物語がここにある。新たな危機がディアフォレストに迫って再び直也があの世界に向かうのだろうか？いや、今度はシンシアが渋谷にやってくるのかもしれない。あるいは直也が実はディアフォレストの出身者だったという設定はどうだろう？彼の命を守るため、次元を越えて赤ん坊の直也は今の両親に託された。直也の父は身を守る術として剣道で彼を鍛えた。やがて、直也はシンシアの兄であることがわかる——そうなれば悲恋だ。いつそ二つの世界がどんどん混ざっていくというのはどうだろう。渋谷の空をガルが飛び回り、109の前をオーク達が徘徊する——なんて姿は不気味だけど圧巻だ。僧団の騎士達はちよつと休憩と言ってマクドナルドでハンバーガーを食べているかもしれない。それとも……。

あれ？あれ？里菜の中に物語が溢れ出す。止まらない、止まらない、次から次へと新しいストーリーが湧いてくる。この図書館に通いつめているうちにいつの間にか物語の続きを考える癖が付いてしまったようだ。

目の前の本を見下ろす。『続・ディアフオレストの風』と書かれた赤い装丁の本。この中に書かれているのは、今想像した物語のどれかと似ているのだろうか？それとも全く別の物語なのだろうか？どちらにしても、この本を開いてしまえば、ここに書かれている物語以外はシンシアや直也の物語ではなくなってしまう。たった一本の物語を除いて彼らが経験することはなくなってしまう。続編が生まれるということの意味を里菜はようやく理解した気がした。

続編が生まれたら、読者は物語の続きを想像することができなくなってしまう——。

どの物語も味わってみたい——そう思うことは欲張りなんだろうか？

里菜は大きく息を吸い込んで目を閉じた。たっぷり時間をかけてよく考えた。そして目を開くと赤い本をトナエの方に押し戻した。

「やっぱり止めとく」

トナエが戸惑った顔付きで里菜を見る。

「続編がないことの幸せがなんとなくわかった気がするから」

里菜は本を手に取るとトナエの手に載せた。トナエはまじまじとその本を見ていたが、やがて口元をほころばせて笑うと後ろの棚に本を戻した。その背中

を見ていた里菜は、ふと本棚の横の壁に入口と同じ張り紙を見つけた。

「あ、それ」

里菜が指差す方を見てトナエも『ああ』と言った。

「今日が締切日です。今から手続きをしましょう」

カードを出すようにトナエは促した。が、里菜はポケットに手を入れずに首を横に振った。

「いろいろ考えたんやけど、もうここに来るのはやめといた方が良いと思う。良くないことの意味もようわかった。これ以上、架空の続編を読み続けん方が良いと思う」

カードの更新のことがなくても、里菜はディアフォレストの風を最後に来るのを止めるつもりでいた。

「でも、カードを更新しなければここへの道も閉ざされてしまいますよ」

トナエの言葉に里菜は一瞬迷ったが、すぐにきっぱりと言った。

「いろいろお世話になりました。今日で最後にさせてもらいます」

声を聞きつけたのだろう。奥からクビキさんが顔を出した。里菜の説明を聞いて『おやおや』と言った。

「そいつは名残惜しいが是非もなしか」

古めかしい言い回しをつぶやくと、『お元気で』と言ってクビキさんは深々

とお辞儀をした。里菜も慌てて立ち上がるとお辞儀を返す。

「何かあればいつでも来れますし、カードの更新だけはしておいたらどうでしょう？」

釈然しやくぜんとしない顔でトナエが言ったが、『また来たくなるからやめとく』と言って里菜はトナエにも丁寧ていねいに挨拶をした。

かばんを肩にかけるともう一度『お世話になりました』と言って里菜は背中を向けた。通路を曲がって玄関に向かおうとした時、トナエが追いかけてきた。

「里菜さん、忘れ物」

封を切ったばかりのチョコレートチョコレートの箱を手に持っている。

「あげるわ。おせんべつ」

笑って里菜は手を振った。

眼下がんげに白い建物が見える。すっかり見慣れた続編図書館は今日も濃い影を落していた。風に乗って漂ってくる草の香りが里菜の鼻をくすぐった。今も、これからも、人が物語を紡つむぐ限り、続編が現れあの書架に並ぶことだろう。そして多くの続編は生まれることもなく元の物語と共に歴史の中へ消えてゆく。その悠久ゆうきゆうの営いみを思うと……くしゃみが出た。

檜ひの扉の前に立って見送ってくれているトナエは里菜と目が合うとお辞儀

をした。里菜もまたお辞儀を返す。

白い建物に背を向けると里菜はもう振り返ることはせず、丘を降りて鉄の扉をくぐった。すぐ後ろで大きな音を立てて扉が閉まった。

「里菜ちゃん、何書いてるのん？」

放課後、かばんを下げた桃ちゃんが里菜の席に寄って来た。

「うん……、ちよつとな」

原稿用紙に書き物をしている里菜は生返事をしたばかりで顔を上げない。何やら取り込み中と察して、さすがの桃ちゃんもそれ以上声をかけずに空いている席に座って里菜を待った。

「うわっ、この栞しおりかわいいやん。小犬の絵なんか写真みたいに精密やし」

手持ちぶさたの桃ちゃんが里菜の机の上から赤いカードをつまんで歓声を上げた。『あげへんで』相変わらず里菜は顔を上げずに言った。

時々、里菜は続編図書館のことを思い浮かべる。面白い本や映画に出会った時などはついどんな続編がああ我的书架にならんでいるんだろうと思つて心がうずくことがある。

ふと思ひ立って、里菜はあの図書館のことを物語に書いてみることにした。題名は『里菜と続編図書館』。小説を書くのなんて初めてなので最初はかなり

苦労した。結局、自分が経験したこと、思ったことを書き連ねた作文のようなものに仕上がった。

今、最後のページを書き進めている。これを書き終えた時、あの書架にまた新しい本が並ぶのだろうか？

『続・里菜と続編図書館』

なんだかくすぐったい気持ちになりながら里菜は最後の一行を——今、書き終えた。

(完)